
初恋

木嶋 稔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋

【Nコード】

N64180

【作者名】

木嶋 稔

【あらすじ】

主人公「新垣美紅」は中学1年生。
そんな美紅が恋したのは
先生の「桜井光治」
叶うはずのない恋だと思っ
ていても
止められなくなっ
て……？

1 #入学（前書き）

意味不明なモノです。

1 # 入学

桜が風に吹かれて舞い散る。

「おはよう、美紅。」

明るい栗色のふわふわした髪を揺らしながら、顔を傾げて話しかけてくるのは

幼馴染でもあり親友の「柏木桃香」。

学年の中でも可愛い方だろう。

「おはよ。」

そう返すと、桃香は優しい笑顔になった。

そして私たちはクラス分けの張つてある掲示板の前へと来た。

「同じクラスだといいね。」

「うん。」

私が自分の名前を探していると隣から桃香の声がした。

「美紅、見て。 同じクラス。」

桃香が差した方を見ると

”1年5組”と書いてある下に私たちの名前があつた。

「よかったあ。」

桃香が顔を綻ばせる。

「教室行こっか。」

私が言つと後ろからトコトコとついてきた。

教室に入ると男子が騒いでいた。

「低レベルだね。」

私がボソつというと桃香がクスッと笑う。

私達は指定されている席について話していた。

私の席は一番後ろの窓側。

桃香はその前。

「近くてよかったね。」

桃香がそう言ったのと同時に

担任の女の先生であろうという人が入ってきた。

「みんな、席についてねー。」

高い声が教室に響く。

みんなが席に着いたのを確認して話し始める。

「今から入学式です。廊下に並んでください。」

言い終わった後に、みんながそろそろと動き出した。

「美紅、行こ。」

桃香も立ち上がった。

「んー、面倒だからサボる。」

「そう？じゃ、行くね。」

そう言っていると廊下に出て行った。

私は昔からサボってばかりいたから

桃香も驚かなくなったんだろう。

桃香が出て行った後、

ボーッと空を眺めていた。

太陽の光が心地よくて、うとうとしていた。

すると、その時廊下から声がした。

2 # 出会い

「入学早々、サボリですかぁー？」

声のする方を見ると、

若そうな人がスーツを着て、教室の戸にもたれかかってこちらを見ていた。

「別にいいでしょ。」

視線を窓の外に戻す。

「いい訳ねえだろ。大問題だぞ。」

足音が近づいてくる。

静かな教室によく響く。

視線をまた教室に戻す。

「名前は？」

私を見下ろしながら聞いてくる。

「新垣美紅。そっちは？」

そついうと頭をポンっ叩かれた。

全然痛くない。

「先生にそんな口聞かない。」

俺は桜井光治。

1年の副担任。」

私はその人の顔をジーっと見てみた。

「な、なんだよ。」

少し戸惑う姿が可愛い。

「本当に先生？」

私が言うときよりも少し強く叩かれた。

「よく言われますが、先生です！」

腰に手を当てて言う。

その姿が可笑しくて、笑ってしまった。

「おもしろいね。」

私が笑つてると、その人が隣の席に座った。
「何で座つてんの？」

私が聞くと少し笑った。

「話し相手になつてやるよ。」

そう言つて、にかつと笑った。

「入学式行けつて言わないの？」

「言つても行かないだろ？」

確かにその通りだ。

その後、いろんなことを話した。

しばらくすると、廊下がざわざわしてきた。

「あ、終わつたんだ。」

「俺までサボつちやつたじゃんか。」

「先生のくせに……。」

また頭を叩かれた。

「暴力反対だよ。」

「暴力じゃない。撫でたんだよ。」

その言葉を聞いた後、

私は叩かれた……撫でられた所を払った。

「うわっ、ひつでえ。」

先生は悲しむマネをした。

「ごめんねー、光治くん。」

頭を撫でてあげた。

「光治くん、言うなー。」

その言葉と同時に生徒が教室に入ってきた。

「あ、俺行かなきゃ。」

そう言つて立ち上がった。

「バイバイ、光治くん。」

「光治くん言うなつて。じゃーな。」

そう言つて教室を出て行った。

「美紅！。 今の人誰？？」

桃香が首を傾げて聞いてくる。

「1年の副担任。」

「ふうん。」

桃香は光治くんが出て行った方を見た。

「おもしろい人だよ。」

私が笑うと、桃香が目を大きくした。

「美紅が笑ったあ！」

「へっ？」

「滅多に笑わないのに。」

確かにそうかも知れない。

最近笑ってないような…。

「あの先生は凄い人だね。」

そう言って笑った。

私も笑った。

それから私は光治くんのが気になり始めた…

3 # 授業

入学から3日目、体育の授業があった。

先生は、光治くん。

私は気の乗らないまま、桃香に連れられて運動場に出た。

「桃香あ、サボっていいー??」

「ダメッ!!どんな先生が見たいもん!!」

入学式のあの事から、桃香は光治くんが気になるらしい。

「普通の人だよ?」

こんなことを言っただけで全然聞いてくれない。

「普通な訳ないでしょ!」

美紅を笑わせた人なんだから!」

本当に普通の人なんだけどなあ。」

私が桃香の後ろを歩いていると、

いきなり後ろから何か硬いもので叩かれた。

「なっ?!」

後ろを振り向くと光治くんが居た。

「今日はサボらなかつたな」

その声と同時に桃香も振り向く。

「あ!!」

桃香が声を出すと、光治くんはきよんとした。

「例の先生!!」

その言葉で私の方を見た。

「例のってなんだよ、例のって」

そう言いながらまた頭を叩いた。

「なんでもないですよ!」

桃香はいつもの笑顔でそう言う私の手をひいて歩いていった。
光治くんはまた、きよんとした。

「あの人だよな？」

みんなが集まってるところまで行くと桃香が振り返って言った。

「そうだけど。普通でしょ？」

「ま、普通だね」

その言葉に笑った。

笑っているとき光治くんがやってきた。

「お前ら集まれー！」

その声でみんながぞろぞろと集まってきた。

「よし！じゃあ、授業を始める」

そう言うとき授業の説明を始めた。

私はその説明を聞くはずもなく、空を見上げた。

今日は雲ひとつない青空だ。

なんて思っていると、声が飛んできた。

「こらあ！新垣！ちゃんと聞け！」

視線を戻すと光治くんがこちらを見ていた。

その時だけ前を見るけど、また違う方を向く。

授業なんて『つまらない』以外の言葉で、どう表せばいいのか。

「　　をする。わかったか？新垣」

いきなり名前を呼ばれて、驚いた。

「わかったよー」

分からないけど分かったフリを試してみた。

「じゃ、来い」

光治くんが手招きをする。

「へっ??」

「へ?じゃない!お前と手本を見せるって言ったら、わかったって
言っただじゃないか」

そんなの聞いてません…。

私は渋々立ち上がった、光治くんの方へと行った。

そこにあっただのはサッカーボールだった。

サッカーでもすんのかな…

私は光治くんの耳元で呟いてみた。

「なにすんの？」

言い終わって光治くんの顔を見ると書類などがはさんである板で頭を叩かれた。

「話聞いてなかったのか、お前」

呆れたように言う。

「私が話しなんか聞くとお思いで？」

また叩かれる。

「罰として後から体育教官室に来い！！」

そう言うともた授業の話に戻った。

自分の場所に帰ると、桃香が笑っていた。

「何、笑ってんのよー」

桃香の頬をつまむと、にこつと笑った。

「だって美紅が楽しそうなんだもん。」

私が楽しそう？

「そんなことないよ」

つまんでいた手を離す。

隣を見ると、まだにっこりと笑っていた。

その笑顔に私も笑ってしまった。

「こらあ！その二人、早く行動する！」

周りを見ると、みんなはサッカーをしていた。

「で、光治くん。サッカーするの？」

立ち上がりながら聞くと、また叩かれた。

「サッカーするの！しかも、光治くん言うな！」

その様子を見て桃香がクスッと笑った。

「えっと……柏木だっけ？」

「ひどっ！生徒の名前ぐらい覚えようよ！光治くん」

お返しに私が頭を叩くと「すみません」と謝ってきた。

「ホラっ、新垣も柏木も早くやるっ！」

そう言いながら、私と桃香の背中を押した。

その時、私は

光治くんが桃香の背中を押したことに
何故か胸が痛んだ。

3 #授業（後書き）

話し言葉が多いですね。

4 #痛む胸

胸が痛む理由は解からないまま、二人でボールをパスしていた。

「美紅、上手いねえ」

そういいながら桃香が蹴ったボールはいろんなところに飛んでいく。

「インサイドで蹴るんだよ」

私は言うけど、桃香はインサイドも解からない状況。

ふとみんなの方に視線をやると、光治くんが女の子達に囲まれていた。

「先生、人気だねえ」

のん気にボールを蹴る桃香。

光治くんはやつと抜け出して、私達の方に歩いてきた。

私は無視してパスを続けた。

「おっ！上手いじゃないか」

私の横で関心しながら見ている。

「先生、モテモテだねえ」

そう言いながら桃香が蹴ったボールは私ではなく光治くんの方に転がっていった。

「生徒にモテても困るよ」

ボールを貰うと私にパスしてきた。

「モテることはいいことじゃん」

私が言うつと困った顔をした。

「受け取れないじゃないか。断るしかないだろ」

また、胸が痛んだ。

パスを止めないまま話しかけてみる。

「もし生徒を好きになつたらどうするの？」

ふと視線を光治くんに向けると、ニヤリと笑っていた。

「さあな？」

意味深な言葉を残して歩いていった。

歩いていくとまた女子に話しかけられている。

胸が痛む。何故だろう。

「今の言葉、何だったんだろうね」

桃香がパスを止めて近づいてきた。

「うん」

光治くんを見つめたまま答えた。

5 #教室

「今日の授業はこれで終わる！」

その言葉と同時にクラスの人が動きだした。

私も桃香と歩き始めた、その時に後ろから呼び止められた。

「新垣。約束忘れたわけじゃないだろうな」

振り返るとニヤッと笑っていた。

思い出してみると、授業の最初に、教室に来いとかなんとか……

「放課後、ちゃんと来いよー」

それだけ言っとボールの片付けを始めた。

私は行く気もないまま返事だけ返しておいて、そのまま歩いていった。

「放課後、ちゃんと行くんだよ？」

「嫌だ」

すると後ろからペシッと桃香に叩かれた。

「先生の真似」

舌を出して可愛く笑っている。今この場に男子が居たならば一瞬にして惚れるであろう。

「最近、頭叩かれまくりなんだよ。馬鹿になるよ」

「そんな簡単に馬鹿にはなりませんよー？」

光治くんに出会ってから、笑う機会が多くなった。

「みなさーん。気をつけて帰ってくださいよー」

担任の先生の高い声が響く。

「桃香、帰ろう」

「えっ！行かなくていいの？」

「どこに……ああ！そうだった。私、行く気ないから
そう言つて教室をあとにした。

玄関に行つても、桃香はあの事が気になるらしい。
ずっと、いいの？つて聞いてくる。

私が軽く流して、玄関を出ると、目に飛び込んできたのは光治くん
の姿だった。

「あーらーがーきー！！」

「げっ！！ 桃香、先帰つてて！！」

その言葉を残すと、回れ右をして学校へ逃げ込んだ。

「ちよっ！逃げんな！！」

光治くんは職員専用の玄関に向かって走つていった。

そのころ、私は一年生教室の廊下に居た。

「なんで居るんだよ……」

眩きながら、上がった息を整えていた。すると後ろから頭を叩かれ
た。

「体育の教師をなめんなよ」

そついう光治くんも息が上がつていた。私はその場にしゃがみ込ん
だ。

「なんで追いかけてくるのー？」

光治くんも私の前にしゃがみ込んだ。

「お前が逃げるから……だろ」

「あんな名前を呼ばれて。逃げない人が何処に居るのか教えて欲し
いよ」

すると光治くんは自分を指指した。

「此処に居る」

その顔が真顔だったことが可笑しかった。

笑っていると、腕を？まれた。

光治くんはそのまま歩いていった。

「ちよっ！！」

腕を振り払おうとするけど、男の人の力は強い。

「痛いよ……」

その言葉を呟くと、少し力を弱めてくれただけで離してはくれなかった。

そのまま、教官室へと入っていった。

そして入ったところで手を離してくれた。

「何？」

聞くと、振り向いて私を見下ろした。

「罰」

「は？」

いきなり発した言葉が「罰」なんて誰でもは？ってなりますよね

「なんて言っただけ、することねえんだよね」

いきなり気の抜けた声になった。

くくく、と笑うと光治くんが口を尖らせた。

「本当、光治くんって面白いよ」

教師だと思えないほどに………

ふと思った、教師だと思えないほどじゃなくて教師だと思いたくないんじゃないかって……

「で、何すればいいんですか？先生」

珍しく敬語を使ってみた。光治くんは驚いているようだ。

その顔が自分より年上とは思えないほど可愛かった。

「そうだなあ」

腕を組んで考え始めた。

「今日はいいや。また今度な」

そう言うのと、にっこりと笑った。

光治くんは玄関まで着いてきた。

「じゃーな」

その声で後ろを向くと、ひらひらと手を振っていた。

「ばいばーい」

私も手を振り返した。

その事がとても嬉しかった。

理由は何故だか解からない。

解からないまま、家へと向かった。

書き直す（前書き）

この小説はなかったものと思ってください。
書き直すんで…

[illegible]

書き直す（後書き）

ご迷惑をお掛けします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6418o/>

初恋

2010年11月4日13時15分発行